

彼は一九〇三年、即ち廿世紀へはいつてから八十歳を超えた高齢で靜かに此の世を去つてゐる。かくて、吾々の哲學史もいよいよ廿世紀へ足を入れることになつたのである。

第七章 現代の哲學

第一節 十九世紀から廿世紀へ

カントの哲學は經驗論と合理論の二つを受けて、之を批判することに依つて成立したものであつた。その意味で、カント哲學は十八世紀の哲學の總決算であつたし、また十九世紀哲學への新しい出發點であつた。のみならずカントは近代哲學の中心問題たる人間精神の自覺自發に哲學的基礎を興へ、且つニュートン物理學との連繫によつて科學と哲學との上に不可離の關係を招來した。哲學の問題が形而上學から認識論に移つたのも此の故であるし、形而上學批判はその實現の具體的方法であつたのである。

ところで、カントの哲學には科學があり、經驗論の臭があるとしても、根柢は矢張り合理論であつた。コペルニクスの轉回によつて意識の自發性と所謂アプリアリなるものを根本に置いた彼の方法は之を證してあまりあるだらう。カント後の哲學は此のアプリアリを

出来るだけ擴げた。フイヒテ、シェリング、ヘーゲルへの動きはアプリアが自我から他我に移り、やがては世界そのものを併呑して行く過程の如實の姿である。かくて、形而上學を批評した批判哲學は再び形而上學となり、浪漫主義の哲學となつた。自然科学は輕視されて浪漫的な精神の優位が説かれたのである。

併し乍ら、現實の狀勢は思辨哲學とは逆な方向に走つてゐた。問題は日一日と天上から下界へ降りて來てゐたのである。自然科学は着々とその偉力を發揮した。佛蘭西革命は別個な姿をとつて所謂プロレタリア革命にまで進展した。資本主義機構の中にも漸く腐敗の臭ひが出て來たのだ。かくて、人々は神の聲よりも現實の姿に注目せねばならぬ羽目になつた。自然科学者が極端な唯物論を説き出したのは此の時である。浪漫主義の哲學が實證主義の哲學に移り、理想主義より現實主義が思潮の中心になつたのも此の時である。

従つて、十九世紀後半は實證主義全盛と言つてもいゝだらう。社會問題も實證主義的精神に依つて考察され實踐された。哲學も實證主義によつて新なる組織に到達した。徹底して言へば、すべての問題が自然科学を模範にして考へられたし、哲學も自然科学の風下に餘命を保つたのである。口の悪い連中が哲學は自然科学の婢であると言つたのも故なきで

はなかつたのである。

廿世紀の哲學は斯うした運命を背後に脊負つて現れて來たのである。哲學が自然科学の婢たることを止めて獨立の主人となるためには非常手段がとられねばならぬことは火を見るよりも明らかだらう。人々は現代初頭の哲學の抽象性や觀念性を非難する前に斯うした哲學の持つ運命、人間精神の移り行きと云ふものに著目しなければならぬのである。

第二節 現代哲學の方向

かくて、現代哲學、即ち廿世紀の哲學の第一の任務は實證主義に對して如何なる處置を構ずるかと云ふことだ。言ひ換へれば、科學と哲學との關係をどう是正するかである。今更、科學を無視することの出來ないことは明かだらう。哲學は科學の本質を認めると同時に科學によつては達せられない問題、つまり科學自身が依つて立つ根柢を明らかにしてやらなければならぬのである。科學の徹底的批判に依つて、哲學の新しい道への第一歩が出来るのである。此の事は、併し、科學者自身に依つても考へられた。科學は果して哲學たることを僭稱し得るか、此の問題が反省されて來たのである。ヘルムホルツやポアンカ

レ等はその一例であると言へよう。

併し、何と言つても、科學批判に徹底した哲學はカントのそれであつた。廿世紀の初頭にかけてカント哲學が猛然として復活し、所謂新カント派なるものがうつ然たる勢力を持つやうになつたのは當然である。

ところで、新カント派はカントの哲學を繼承するものとして、當然、認識論中心の哲學であつた。新しい理想を掲げて實證主義を超克して行く手並は素晴らしいが、論理の必然と價値の妥當のみでは未だ哲學本來の姿を取り戻したとは言へない。此處に現象學派が擡頭して來る秘密がある。現象學派は哲學に本來的な道を指示すると同時に認識論中心から形而上學的な方向へと一步を突き進んだ。形而上學への要求は哲學が自己に歸つた一つの現れである。かくて、アリストテレス式の形而上學が再び姿を出すやうになつた。それが、所謂オントロギー（存在論）の主張である。

更に、哲學は科學との對質上、論理に徹底し主知的傾向をとらざるを得なかつたが、論理性はよく考へれば人間の半面にすぎない。人間には本能もあれば衝動もあるし、感情もある。ベルグソンが直觀哲學を説いたのも偶然では無かつた。デイルタイ一派の生の哲學

も斯うした人間の知情意全部の満足を目的として現はれたのである。その上、從來主知的方向からのみ見られてゐた人間、いはゆる理性的動物としての人間に疑が生じて來た。人間とは何か、之が新に加へられた重要な問題である。ハイデッガーの「基礎的存在論」は斯うした問題への重要な解答であると同時に哲學のとるべき新なる方向に對して多くの示唆を持つてゐる。

次に、しばしば語つた如く、哲學の方向は哲學自身の力のみでは決定することが出來ない。哲學は自己の哲學史的課題に向つて進むと同時に、それは時代的、文化的な現實的諸力によつても大きな影響を受けるのだ。此の意味で、廿世紀の哲學から「世界大戰」を見落すことは出來ない。更に世界大戰後の資本主義の動搖と新なるマルキシズムの勃興を忘れることは出來ない。マルキシズムの思潮は哲學の中に大きな印象を與へてゐるのである。同じ意味で、ファッシズムの思潮も哲學と無關係ではない。今や個人と社會、個と全との問題は新なる局面に打つかつたし、理想と現實、特に社會の問題は別個の解決を要求して止まぬ。かくて、哲學の問題は歴史を中心とするやうになつて來た。國家や社會を歴史を通じて出來るだけ具體的に把握せんとするのである。新カント派や現象學に代つてヘーゲ

ル哲學が歡迎される所以も此處にある。

第三節 亞米利加の哲學

北米合衆國がアメリカ獨立戰爭を始めたのは、一七七五年で、獨立が完全に承認されたのは一七八三年である。従つて、アメリカがそれ自身の思想を持ち、それ自身の哲學を開展したのは此の獨立戰爭以後であると見なければならぬ。

併し、その以前に思想が無かつたと云ふわけではない。それどころか、合衆國の建國、つまり、その昔英國人がアメリカに植民地を拓いたそのことが既に大いなる思想運動であつた。即ち、一六二〇年英國の清教徒が本國政府の宗教的壓迫を免れて、メイフラワー號に乗つて渡米して、プリマウスに植民地を拓いたことは、單なる經濟欲と云ふよりも思想的宗教的信條の結果だつたのである。そして、此の様な清教徒的な氣持は一面現在にも生きてゐるし、一種の國民性を形づくつてゐる。

たゞ、思想的宗教的な信條は未だそのまゝでは哲學ではない。哲學はかゝる信條を基本としつゝも、更に科學やその他の經驗、歴史的變化の堆積等を加へて、之を學問的科學的

に練り上げる時に始めて成立するのである。そして、此の様な修練は實は一朝一夕に出来るものではない。その意味で、フランクリンとか、ジェファソン、エマーソンと言つたやうな思想家を出した時代のアメリカは未だ哲學的には熟してゐなかつた。アメリカが哲學的に熟して來たのは十九世紀末期から、つまり、現代へ來てからである。

ところで、十九世紀末期から現代へかけてのアメリカ哲學は大體、

一、觀念論

二、プラグマチズム

三、實在論

の三つに分けることが出来る。第一の觀念論は獨逸哲學の影響下に實を結んだもので、その代表者はジョサイア・ロイス (Josiah Royce 一八五五—一九一六) である。

ロイスは加州出身で、同地の大學卒業後は獨逸に學び、其處でロッツェに聽講し、その間にカントやヘーゲルやシェリング、シヨペンハウエル等の思想を充分吸収した。従つて、彼の思想は非常に獨逸的である。けれども「ロイスを見失ふ勿れ」と言つて彼を極力推輓したのが、有名な獨逸嫌ひのジェームズであつたところを見ると、彼の哲學が必ずしも獨

逸一點張りでなかつたことがわかる。ヘーゲルの世界精神と通ずるところのある「全體者の意志」と云ふものを建て、一種の絶對的觀念論を語りながら、而もそれをアメリカ的に飽くまでも「人間の經驗」として考へようとするところに彼のオリヂナルがあつたと言へるのである。

ロイスの哲學は讀んで重味があるし、多少のユーモアもあつて、吾々日本人としては最も多く慕しみを感ずる學者である。けれども、彼のものはアメリカ的な臭ひがどうしても少ない。そこへいくと、キリアム・ジェームズの哲學は實に潑刺としてゐて、最もアメリカ的であるし、アメリカの特徴をよく發揮してゐる。ジェームズに依つてアメリカの哲學が世界に於ける一つの地位を獲得したと言はれるのも此の故であらう。

ジェームズ (William James 一八四二—一九一〇) はロイスと反對側の紐育の生れであつた。始め理科學校で化學及び比較解剖學を學び、後ハーバート大學で醫學をやり、醫學博士にもなつてゐる。一八七二年から學生に生理學を教へるやうになつたが、之がきつかけで以後ずつとハーバート大學に地位を得てゐる。従つて、彼は始めつからの哲學者ではない。生理學を指導してゐる中に心理學に轉向し、それから哲學に向つたのである。

斯うした自然科学的な臭ひの多い人だからその言ふことが科學的だらうと思はれるかも知れないが、どうして、彼は中々の達人で恐らく人物としても一頭地を抜いてゐたらうと思はれる點が多い。學說的には相容れないロイスを彼が推輓したことは既に述べたが、物わかりのいゝ藝術家的な人だつたらしいのである。それに、後に説くデュキーとよりも觀念論者ロイスと話が合つてゐたと云ふのが一面から見れば彼の人格を語つてゐる。彼が最も嫌つてゐたのは青褪めた概念と偏癩な専門家氣質であつたと傳へられてゐるのも彼の教養の廣さを示すものであらう。

面白いことには、ジェームズの弟がヘンリー・ジェームズと云ふ例の小説家である。此の小説家は傳統と教養の足りない、ただかせぐばかりのアメリカが嫌でとう／＼アメリカの國籍を離れて英國へ走つた男である。兄キリアムは小説のやうな哲學を書き、弟ヘンリーは哲學のやうな小説を書くと世間から言はれてゐたと云ふのもジェームズその人の方向を知る一助となるだらう。その上、兄弟の父親が矢張りヘンリーと云ふのだつたが、之が又大の變り者でスエーデンボルグの全集をいつも抱へてゐたと傳へられてゐる。吾々のジエームズにもさう云ふ血が流れてゐたのである。

とにかく、斯うした人間ジェームズの力に依つてアメリカの哲學はその獨得の存在を勝ち得るやうになつた。それが、いはゆるプラグマチズム（實用主義）の哲學である。

ジェームズに依ると、眞理は實際的效果を持つものでなければならぬと云ふ。吾々の具體的な生活經驗に何かの效き目がなければ、凡そ眞理の名を冠することは出来ないのである。成る程、理窟や理論はいろ／＼に立つ。併し、眞理そのものはさうした論議に依つて決定されるのではない。事實の上に立證され、經驗に效き目のあることが第一の先決條件なのだ。

次に、ジェームズの死後、プラグマチズムの代表者として現代の米國哲學界に重きをなしてゐる人がある。それがコロンビア大學の教授ジョン・デューキー（John Dewey 一八五九—）である。

デューキーも、その精神に於てはジェームズと大體同じであるが、併し、デューキーの方がジェームズよりも實行的動的であり、又實驗的なところがある。即ち、彼に依ると、眞理は先づ有効に活動するものでなければならぬ。行詰りを打開し、前途に道を拓く働きのある觀念が眞理だ。逆に言へば、人間の欲求を實現せんがための、眞の道具となり得るも

のが即ち眞理である。かくて、彼のプラグマチズムは眞理器具主義（Instrumentalism）若しくは道具主義と言はれてゐる。哲學を人生の生きた事實の裡に見出さうとする努力は買ふべきであらう。

尙、ジェームズが主張した「純粹經驗」の思想を發展させて、其處から實在論的思潮を呼び起した一派がある。之が謂ふところの「新實在論」と「批判的實在論」である。

新實在論は一九一〇年六人の哲學者が共同で一種の學問的聲明書を出し、更に一九二二年「新實在論」といふ共同研究書を發表したところに發端してゐる。六人といふのはハウルト、マーギン、モンタギュー、ペリー、ピツキン、スポールディング等である。ところが、此の新實在論に對して苦情を申し込んだ人達がある。之が「批判的實在論」で、之も七人の同主義者が共同研究書を發表したところに端を發してゐる。七人といふのはドレーク、ラブジョイ、プラット、ロージャース、サンタヤナ、セラース、ストロング等である。

是等の人達の遣り方はまことにアメリカ的で興味のある所であるが、吾々は先づ之を割愛して結論に急ぐことにしよう。

第四節 日本哲學の視角

西洋人にとつて「世界」と云ふ言葉は「歐洲」と云ふ言葉と同義語であつた。彼等が世界精神を語り、世界哲學を論ずる時、それは他ならぬ歐洲文化のことであつて、印度も支那も日本も考へられてゐたわけではない。かくて、西洋人の眼には凡ゆる文化は西洋といふ視角からのみ見られて來た。いな、歐洲の文化のみが正當であり、歐洲の文化のみが世界に、地球上に光被すべきであると考へられて來たのである。

此の態度はキリスト教に於て最も極端であつた。彼等は素朴にも、キリスト教は世界宗教であると考へて來た。あらゆる民族はキリスト教を信仰せねばならぬと考へて來た。もちろん「世界宗教」といふ言葉は別の解釋の仕方があるだらう。併し、現實の西洋人は、キリスト教徒以外の人間はすべてこれ異端邪説の徒であるとして來たのである。だから彼等は勇敢にキリスト教を宣傳した。「世界宗教」は事實上全世界を支配せねばならぬと思つてゐたのである。言ひ換へれば、佛教もマホメット教も親鸞教もそれ〴〵世界宗教といふ性格を持つてゐることを敢て知らうとはしなかつたのだ。

もつとも、キリスト教を宣傳したことは一種の手品であつたとも見られる。スノーデン卿の言ひぐさではないが「宗教先づ進み、商品これに續く」と云ふのが彼等の本音であらう。商品を賣らんがために先づ宗教を宣傳するのである。

かくて、日本にも早くからキリスト教がはいつて來た。いな、キリスト教的攻勢が早くから始まつてゐたのだ。だが、信長や秀吉の天才性は、既に早くもキリスト教の臭いことを感ずいた。キリスト教は禁斷の宗教となつて本格的な生長を遂げることが出来なかつたのである。

だが、禁斷に逢つたからキリスト教は日本で榮えなかつたと速斷してはならない。由來、宗教といふものは必ず禁斷と壓迫とを受けるものである。強い言ひ方をすれば、宗教は血を見なければ發展しないのだ。血を浴び血を流すことによつてぐんぐん伸びて行くのが宗教の、特にキリスト教の性格である。之はイエス自身の死を考へてもわかるだらう。イエスが十字架上の犠牲とならなかつたならばキリスト教といふものは存在しなかつたかも知れないのだ。皇帝ネロの治下に如何に多くのキリスト教徒が逆殺されたかは此處で敢て語るまでもあるまい。キリスト教徒は無限の血を流すことによつて遂にはジュリアン皇

帝自身をもキリスト教徒たらしめることが出来たのである。

そこで、此の筆法から行けば、日本に於てもキリスト教は壓迫を押し除けて繁榮すべきであつたかも知れない。いな、日本人の性格から言へば、一度受け入れた以上は究極の所まで發展させなければ止まないものである。それが遂に本格的な繁榮をもたらし得なかつたと云ふことは、キリスト教と日本の精神との間に大いなる差があるからである。讀者は試みに舊約聖書の創生記で語られてゐる神話と古事記や日本書紀に述べられてゐる神話とを比較して見るといひ。其處には本質的なちがひがあるのだ。これは民族精神の差である。此の差があるが故に、そして、日本の民族精神が以外に強固であつたが故にキリスト教は遂に日本に於て本格的な生長を遂げることが出来なかつたのである。換言すれば、「血を流す」と云ふキリスト教發展のためには寧ろ好條件とも云ふべきものが備つてゐたにも拘らず、單なる民間宗教として所謂「信仰の自由」に依つてその生存を保つことになつたのである。

ところが、儒教や佛教は民間の信仰となつたばかりでなく、又、やんごとなき人達の宗教となり教養となつてゐる。之は單なる理論や感情ではなく、歴史上の事實である。そし

て、吾々は此處に日本精神の持つ一種の根本態度を見ることが出来るだらう。或る意味では、日本精神は西洋精神に對して實に頑強に執拗に抵抗して來たのである。

此の事實は蔣介石のことを考へると更にはつきりする。聞くところによると蔣介石の夫人は猛烈なクリスチャンであるし、蔣介石自身も亦キリスト教徒になつたし、生活指導はもつぱらキリスト教精神によつて行はれてゐると云ふ。蔣一家がキリスト教を信じたと云ふことは、更に又、支那の若きインテリの多くがキリスト教を信ずると云ふことは、之は支那精神にとつては大きな問題である。そして、西洋人の眼から見れば實に愉快なことであらう。

更に、支那ではキリスト教を受け入れることは徹底的であつたが、西洋の科學思想や技術を受け入れる段になると非常に鈍感であつた。ところが、日本では、科學思想や技術は實に巧妙に敏活に之を受け入れてゐながら、西洋思想の根源の一つであるキリスト教になると大いにしぶつてゐるのだ。西洋人が之を見る時、一種の不快に襲はれるのは當然であらう。殊にアメリカ人が日本人の此の態度に對して飽き足らぬものを感じるのは故なきではない。だが、これは日本が正しいのである。科學とか技術といふものは普遍的であり世

界共通であるが故に何處の國如何なる民族が流用しても差支へない。ところが、宗教とか形而上學と云ふものは獨自なもので、これは商品のやうに押しつけることは出来ないのである。日本が日本のものを持ちつづけ、日本の精神の上に足を置いてゐることは當然すぎる程當然であると言へよう。

私は敢て宗教を語つて來たが、之は西洋精神に對する日本精神の態度なり立場なりを示すには一番いい方法であると思つたからである。それに何を言つても宗教的精神は大きな力を持つてゐる。専門の哲學が僅かの人達に依つて考へられてゐるのに對して、宗教は全面的綜合的な力を持つてゐる。だから、宗教的精神を如何に受け入れるかと云ふことに依つて精神上的の闘争は勝敗が決定されると言つて差支へないのである。そして、日本は此の點ではよく日本的なものを持ち堪へて來た。恐らく、將來も此の根本態度に變化はないだらう。變化があるとすれば、從來の守勢的態度が攻勢的なものに轉ずるだけである。

哲學に於ても此の點では變りがない。明治以後の日本は實によく西洋の哲學を受け入れ

て來た。日本人が西洋の哲學を勉強する態度は實に眞劍で開放的で、一言一句も無駄にはしないやうな忠實ぶりであつた。だが、果して日本人が西洋哲學を全面的に受け入れたかどうかは疑問である。

成る程、一時は日本人も西洋の哲學に眩惑された形であつた。殊にいはいはゆる「科學的哲學」に對しては苦もなく頭を下げたやうである。だが、今になつて反省して見ると之は西洋の技術や科學に頭を下げたのと同様の態度である。つまり、日本人は西洋の哲學を「信條」や人生觀上の「原理」としてではなく、單に一個の「理論」として受け入れたにすぎないのだ。その證據には、西洋の形而上學そのものは何等日本の人生觀の中には生きて來てゐない。率直に言つて哲學の生粹なところは形而上學である。科學に頭を下げた哲學、科學の婢となつた哲學は單に科學のためのものであつて哲學本來のすがたではない。いはば單なる理論としての哲學である。さう云ふ理論は一般的な性格を持つものであつて、日本人が科學を處理する都合上、之を熱心に受け入れたのは當然である。併し、さう云ふ理論ではなく、哲學本來のすがたになつて來ると日本人の態度は以外に頑強である。いはゆる東洋哲學を専攻してゐる人達や日本哲學をやつてゐる人達が頑強であるのは當り前であ

るが、西洋哲學を專攻してゐる人でも此の點に於ては變りがないのだ。

昭和二年七月その著「働くものから見るものへ」の序文で西田幾多郎氏は次の如く述べてゐる。「形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる發展には、尙ぶべきもの、學ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年來我等の祖先を^{はく}孚み來つた東洋文化の根柢には、形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くと言つた様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない。私はかゝる要求に哲學的根據を興へて見たいと思ふのである」と。之は甚だ謙遜な表現法であるが、何かしら西洋哲學をがちり受けとめてゐる感じがする。西洋哲學も受け入れるがとても東洋哲學を棄てることは出来ない、むしろ、建設面に於ては東洋の道を選ぶと云ふ意味だらう。

紀平正美氏にいたつては此の間の消息が徹底してゐる。彼は「行の哲學」の最後に「我は日本人なり」と大書してゐるのだ。大書してゐると云ふのは、一號活字でゴチックで印刷してゐるのである。おまけに「日本人たるの價値を創造する戦の勇士たることは是なり」と云ふ言葉もくつついてゐる。とにかく、之が大正十一年に投げつけられた言葉である。

大正年代はまだ歐化的な雰圍氣のあつた時代であるが、哲學者達の氣概は既に完全に西洋を併呑してゐたのである。

哲學者が好んで使用する言葉に「證上に萬法あらしめ、出路に一如を行する」と云ふのがある。恐らくは日本の哲學者の氣持は之ではなからうか。理論はさまざまであつていい。併し、原理とするところ、信條とするところ其れは只一つ「日本人」と云ふことである。之は併し、決して偏狹を固執すると云ふ意味ではない。儒教をとり入れ、佛教を活かし、西洋の科學を吸収して來た日本人は偏狹どころか、廣大すぎる位である。つまりは、證上に萬法あらしめ、出路に一如を行する、と云ふ精神に徹底してゐるのである。

方向を轉じて再び西洋人の「西洋主義」を考へて見よう。既に述べた如く、西洋人が世界と云ふ時、それは殆んどの場合歐洲のことであつた。だから彼等が「世界史」を書くと言へば歐洲史を書くことである。アメリカが獨立し、南北兩アメリカが一個獨立の存在をなしてゐても、それは地理上のことであつて、精神的思想的には歐洲と同様であり、米國人も自分達を歐洲から切り離して考へてはゐなかつた。

ところが、斯う云ふ歐洲主義に動搖をもたらしたのが、第一次世界大戦である。此の大戦は日本とアメリカが聯合國に参加することに依つて勝敗の決がきまつたのである。これはアメリカ人に一種の精神的優越感を興へると同時に、戦後の動搖につかれた歐洲人をしてアメリカに對して一種のあこがれを持たせるやうになつた。かくて、アメリカは經濟的にも思想的にも漸く一種の別天地をなす地位になつた。從來、單なる植民地程度にしか扱はれてゐなかつたアメリカが俄然歐洲の前にのしかゝつて來たのである。

日本の場合は少々事情が異なつてゐた。アメリカに許した世界的地位を日本に許すことは歐洲人には出來ない。殊にアメリカが承知しなかつた。いな、歐米は共同して日本の前に大手をひろげて立ちふさがつたのである。思想的にはロンドンから打ち出すデモクラシーがアメリカを通つて日本に流れ込んで來た。軍備縮小の問題はその具體的現はれの一つである。併し、滿洲事變以來の日本は怒濤の如く日本自身を主張することになつた。日本は東亞をひつさげて立ち上ることになつたのである。

第二次世界大戦の結果は恐らく歐洲とアメリカと東亞といふ三つのブロックを明瞭に區劃づけるだらう。かくて、歐洲即ち世界といふ思想は先づアメリカに依つて打破され、次

に日本に依つて打破されるのである。歐洲人が世界は自分達のものだけではなかつたと云ふことを知る時が事實に於て來てしまつたのである。

換言すれば、歐洲人はその世界政策から一先づ手をひいて、己れを守ること、つまり、歐洲をして歐洲人の歐洲たらしめることに依つてのみ從來の侵略的邪道から己れを救ひ出すことが出来るし、眞の意味に於ける「世界文化」に貢獻することが出来るのである。そして、此の事は文化史的に見ても然りである。

由來、歐洲の哲學、藝術、科學、宗教はいづれも共通の根源を持つてゐる。従つて之を一本の樹として育てることは必ずしも不可能ではない。政治的經濟的にも聯合必ずしも不可能ではない。恐らくヒトラー等の考へも此處に落ちつくだらう。そこで、アメリカを中心にする新しい文化圏と日本を中心とする東亞の文化圏とそれに歐洲及びロシアの文化圏と言つた様なものが對立することになる。そして、是等の文化圏は各自にその天分と領域を自覺することに依つて本來の世界文化を進展せしめることが出来るのである。哲學だけで言へば、日本人が歐米の哲學を認めると同時に、彼等も亦、自國の哲學を反省して日本の哲學、印度や支那の哲學の本質を認めなければならぬのである。

私は此の點では特に歐米人の自省が必要であると思つてゐる一人である。蓋し、近代歐洲はその科學主義と合理主義によつて、世界史上稀に見る物質文明を築いて來た。一六〇〇年から一九〇〇年に到る西洋の科學文化、技術文化の進展は恐らく西洋人自身も之を一大驚異と感じてゐるであらう。數千年後の歴史家も近世三百年間の一大偉觀として直ちに「科學」を擧げるに相違ないのである。だが、此の文化には確かに片手落ちな點があつた。今その原因を説明してゐる暇がないが、之は西洋人の本質的な缺陷であると同時に、近代西洋人が持つてゐる缺陷でもある。彼等は此の缺陷に氣がつかず、強いて自己の文化のみを本來の文化と考へたがるやうであるが、「心術」を缺いた文化は永續性がないのだ。のみならず、科學とか技術といふものは西洋人のみの獨占であるかの如く見られ安いのであるが、之が抑々の誤解であつた。成る程、時間に多少の先後はあるだらう。併し年下の人間が年の下なことを慨くのも滑稽であるし、年上の人間が三年早く生れたことを自慢するのをかした話である。日本には日本の事情があつて技術の展開には遅れたが、之はたゞ遅れたといふだけであつて決して劣等であるといふ意味ではない。況してや西洋に發達した潜水艦を取り入れて西洋人以上に運轉するのが日本人であるといふ。飛行機を操縦

するのは體質から言つても技術から言つても日本が世界一だらうと言はれてゐる位である。

人によると、日本には西洋の如き哲學が無かつたといふ人がある。此の言葉は善にも惡にも解釋されるが、時々此の言葉を、日本には哲學がない、といふ言葉と同義語に見る人がある。さう云ふ人達は哲學と言へばすぐ西洋の哲學だけがあると思ふ連中であり、之は文化と言へばすぐ西洋の文化のみを考へ、世界と言へばすぐ歐米のことだと思ふ手合である。

西洋に發達した哲學だけをとつて見ても、古代と中世と近世とではその信念、その相貌に於て非常な差があるし、況んや、日本や支那の哲學が西洋のそれと異なつてゐるのは當然であり、日本に西洋流の哲學が無かつたのも不思議でない。大膽な言ひ方をすれば、近世の西洋哲學は科學と野合して生れ出て來たもので哲學としてはむしろ下下である。いな、中世の哲學が神學の婢であつたならば、近代の西洋哲學は全く「科學の婢」であつたと言つて差支へないだらう。合理的機械觀的自然觀と人間觀に壓倒されて人間が本來何であるか、哲學が本來如何なる職分を持つかといふことすら彼等は忘却せんとしてゐたので

ある。

惟ふに、人間が「知識する」態度には二つある。一つは支配し利用し奪はんがためのものであり、之は「知は力なり」と云ふ言葉で表現出来る。西洋の科學は大體此の方向に於て發展して來たものである。シュペングラーが、近代科學は權力への意志に對する奉仕者であり、従つて實驗的であり、機械主義的であり、實踐と勞働が先達であると云つたのも恐らく此の意味からであらう。西洋の哲學も此の範疇を出でないのである。だから、西洋人は自然を支配することを知つて愛することを知らない。裸體畫や課體像が早く發達してゐながら風景畫や自然を描いた詩文が漸く近代になつてぽつ／＼現はれて來たのも此のためである。

ところが「知識する」別の態度には愛と敬とがある。東洋人は自然を支配するよりも寧ろ自然を愛して來た國民である。だから、山は神の住む山であり、富士山には信仰上から登る人が多い。決して「アルプス征服」が東洋人本來の氣持であるのではない。「六根の清淨」を唱へながら登山する姿がほんたうのものであらう。印度の哲學者が如何に森林を愛して來たか。「ブラーマン」と「アートマン」の關係は西洋の如何なる哲學よりも人間

精神の立場を明瞭にしてゐると言へるのである。のみならず、儒教に於て最もはつきり現はれてゐるやうに、知の根源は「敬」であつた。「教」を愛敬するが故に始めて「學ぶ」ことが出来るのであり、自然を愛するが故に自然の生きた姿を體得することが出来るのである。東洋の繪畫の大半が風景畫であり、その詩文の殆どが自然と關係を持つてゐるのも無理からぬことであらう。

最後に、現在及び近き將來に於て人類は精神的に見て曾て見ざる大きな飛躍をするであらうと思はれる節が多い。それは、西洋人が東洋のものを率直に受け入れ、逆に東洋人が西洋人のものを大膽に利用することによつて實現されるのである。現にアメリカ人などはしきりと支那の古典思想を吸収し出して來てゐるし、獨逸や伊太利では日本精神の研究に餘念がない。西洋人自身も從來の西洋哲學の行きづまりを感じて來たし、日本人は日本哲學とか東洋哲學と言はれるものの強みを自覺して來た。之から先は相互の腹藝によつて決着される。いはば相互の切磋琢磨が必要なのだ。うぬぼれることは禁物である。此の意味で私はいつも刀と砥石の例を持ち出す。日本精神が如何に立派であり、素晴しくとも、錆びた刀であつては駄目である。刀は常に砥石によつてみがかねばならない。砥石とい

ふのは此の場合西洋哲學のことである。そして、刀と砥石には相方に異なつた自然性がある様に、日本精神と西洋の精神にはそれ〴〵特異なものがある。いな、此の差異がある故にこそ日本精神は西洋の精神に打つかつて己れを磨くことが出来るのだ。戦ふ者にのみ勝利があると言はれてゐるが、日本精神の戦ひは今後益々展開されねばならないであらう。

附録 西洋・東洋對照哲學史年表

近世より現代迄

西紀 西洋哲學史

- 1598 | ナントの勅令發布。
- 1618 | 三十年戦争始まる。
- 1619 |
- 1621 | ジュウランクス生る。(一六六九死)
- 1623 | パスカル生る。(一六六二死)
- 1627 |
- 1630 |
- 1632 | スピノザ生る。(一六七七死) 此の年同じく英國の哲學者

皇紀 東洋哲學史

- 2258 | 秀吉薨ず。谷時中生る。
- 2278 | 山崎闇齋生る。
- 2279 | 熊澤蕃山生る。
- 2281 | 木下順庵、雨森芳洲生る。
- 2287 | 伊藤仁齋生る。(二三六九綱吉時代に死)
- 2290 | 貝原益軒生る。(二三七四死)

Handwritten notes in Japanese, including a large oval diagram and various annotations. The text includes:

- Left side: 本條は... 相は... 姓は...
- Top center: 其の立件... 彼の家の屋を...
- Center: みてみる。口ミヤ政府から...
- Right side: 毎月十九日の夜... 見てみる...

ジョン・ロック生る。ロックは一七〇四に歿す。

1638 | マルブランシュ生る。

1642 | ニュートン生る。(一七二七死)

1646 | ライプニッツ生る。(一七一六死)

1666 | |

1668 | ジャンバチスタ・ヴィコ生る。(一七四四死)

1680 | |

1685 | バークレー生る。(一七五三死) ヘルデル生る。

1694 | ハッチソン、ライマールス、ヴォルテール等生る。

1709 | ラメトリー生る。

1711 | ヒューム生る。(一七六六死)

1712 | ルソー生る。(一七七八死)

1714 | バウムガルテン生る。(一七六二死)

1716 | ライプニッツ死す。

1724 | イマヌエル・カント生る。カントは一八〇四年ナポレオンが帝位に登つた年に歿す

1728 | |

1729 | メンデルス ー、レッシング等生る。

1734 | |

1736 | ラグランジュ生る。(一八一三死)

1743 | コンドルセー生る。(一七九四死)

1746 | ベスタロッチ生る。(一八二七死)

2302 | 關孝和生る。

2326 | 物徂徠生る。

2340 | 太宰春台生る。

2345 | 石田梅巖生る。(二四〇四死)

2376 | 本居宣長生る。宣長は二四六

一年十一代將軍家齊の時代に死す。(年七二)

2388 | 細井平洲生る。平洲は二四六一年歿。

2394 | 皆川淇園生る。

2403 | 龜井南冥生る。

- 1748 | ベンタム生る。(一八三二死)
- 1749 | ゲーテ生る。(一八三二死)
- 1759 | シルレル生る。(一八〇五死)
- 1760 | サン・シモン生る。(一八二五死)
- 1762 | フィヒテ生る。(一八一四死)
- 1765 | バーデル生る。(一八四一死)
- 1766 | マルサス生る。(一八三四死)
- 1768 | シュライエルマツヘル生る。(一八三四死) 此の年ワット
蒸汽機關を發明す。
- 1769 |
- 1770 | ヘーゲル生る。(一八三一死)
- 1772 | ノバールリス、シュレーゲル、リカード等生る。
- 1773 | ゼームズ・ミル生る。(一八三六死) フリース生る。(一八
四三死)
- 1775 | シェリング生る。(一八五四死) アメリカ合衆國の獨立戰
争は一七七四—一七八三に互つて行はる。
- 1776 | ヘルバルト生る。(一八四一死)
- 1780 |
- 1781 | ボルツァーノ生る。(一八四八死)
- 1787 | カントの純粹理性批判出づ。
- 1788 | ハミルトン(一八五六死) ショペンハウエル生る。(一八六
〇死) 此の翌年フランス革命起る。
- 1793 |

- 2422 | 五井蘭洲歿す。(年六六)
- 2428 | 僧白隱寂す。(年八四)
- 2429 | 佐藤信淵生る。加茂真淵死す
(年七三) 青木昆陽生る。(死
年七二)
- 2432 | 佐藤一齋生る。此の年田沼意
- 2440 | 頼山陽生る。(二四九二歿)
- 2447 | 二宮尊徳生る。松平定信老中
に任ず。
- 2453 | 大鹽中齋生る。高山彦九郎自
殺。林子平歿す。

次老中となる。

1795 |カーライル(一八八一死) 歴史家ランケ生る。(一八八六死)

1798 |ベネケ(一八五四死) コント生る。(一八五七死)

1801 |ワイセ(一八六六死) フェヒネル生る。(一八八七死)

1804 |カント死す。此の翌年シルレル死す。シュトラウス生る。フオイエルバッハ生る。

1806 |ステュアート・ミル生る。(一八七三死)

1815 |ナポレオン、エルバ島を脱す。

1817 |ロツツェ(一八八一死) フォークト生る。(一八九五死)

1820 |スペンサー生る。(一九〇三死)

2461 |本居宜長死す。地理學者久保赤水歿す。(年八五)

2466 |藤田東湖生る。東湖は十三代家定の時、江戸地震のために死す。(年五〇)

2475 |佐久間象山生る。此の年杉田玄白蘭學事始を著す。

2490 |吉田松陰生る。

2492 |中村敬宇生る。頼山陽歿す。

2493 |杉田玄白歿す(年七一)此の年宇田川榕庵植學啓原を著す。

1830 |

1831 |ヘーゲル死す。

1832 |ゲーテ死す。ペンタム死す。ヴント生る。(一九二〇死)

1833 |デイルタイ生る。(一九二二死)

1834 |ヘッケル生る。(一九一八死)

1836 |グリーン生る。(一八八二死)

1838 |マツハ(一九一六死) ブレンタノー生る。(一九一七死)

1842 |キリアム・ゼームズ(一九一〇死) コーヘン(一九〇四死)

1843 |タルド生る。(一九〇四死)

1844 |ニイチエ(一九〇〇死) リール生る。(一九二四死)

1845 |ブートロー生る。(一九一八死)

1866 | クローチェ生る。
 1867 | ドリーシュ生る。
 1871 | シュテルン生る。
 1872 | ラッセル生る。
 1874 | マックス・シェーラー生る。(一九二八死)
 1882 | ニコライ・ハルトマン、シュブランガー生る。
 1883 | ヤスパース生る。
 1889 | ハイデッガー生る。
 9136 | リツケルト死。(年七四)
 1938 | フッサール死。(年八〇)
 1941 | ベルグソン死。(年八一)

2528 | 明治元年

1846 | オイケン(一九二六死)ブラッドレー生る。(一九二四死)
 1848 | キンデルバント生る。(一九一五死)パリーの二月革命。
 1853 | マイノング生る。(一九二〇死)
 1854 | ギュイヨウ(一八八八死)ポアンカレ(一九一三死)ナ
 トルプ(一九二四死)生る。此の年シェリング死す。クリ
 ミヤ戦争始まる。
 1856 | |
 1858 | ジンメル生る。(一九一八死)
 1859 | デュキー、ベルグソン、フッサール等生る。ダーキンの種
 の起原出版さる。
 1863 | ミュンスターベルク(一九一六死)リツケルト(一九三六
 死)生る。
 1865 | トレルチ生る。(一九二四死)

2506 | 伴信友歿す。(年七四)
 2508 | 瀧澤馬琴死す。(年八一)
 2514 | 井上哲次郎生る。吉田松陰捕
 へらる。
 2516 | 二宮尊徳歿す。
 2519 | 頼三樹、橋本左内、吉田松陰
 等の刑罰。

參考文獻

高橋敬視著	安部光槌著	○安倍能成著	○安倍能成著	○フオルレン・吉野・古在譯	オ倍イ能成譯著	○速水敬二編	○岩波編	理想社編	岩波編	理想社編	理想社編
西洋哲學史講義	希臘哲學概論	西洋近代哲學史	西洋古代中世哲學史	西洋哲學史全三卷	大思想家の人生觀	哲學年表	哲學講座	新哲學講座	世界思潮	世界精神史講座	世界精神史講座
大同館	新生堂	岩波書店	岩波書店	岩波書店	岩波書店	岩波書店	岩波書店	理想社	岩波書店	理想社	理想社

大島 豊著 現代哲學史 第一書房

高見澤榮壽著 西洋哲學史講話 甲子社書房

波多野精一著 哲學史要 大日本圖書株式會社

大島正徳著 近世英國哲學史 三共出版社

デューラント著 西洋哲學物語 アールス

村松正俊譯 西洋哲學史 警醒社

大西博士全集第三卷 西洋哲學史 警醒社

ヘフディング著 近世哲學史上下 第一書房

北 吟吉譯 近世哲學史上下 第一書房

ギンデルバント著 一般哲學史 第一書房

井上忻治譯 一般哲學史 第一書房

尙、坂口昂の概觀世界思潮ゼランケの歐洲近世史の如き一般史と哲學史とを對照することが必要であり、同時に、著名なる哲學者、例へばプラトンとかヘーゲルとかアリストテレスのやうな哲學者の傳記や研究物を讀む必要があり、さうした文獻も相當に出てる。それ等についてはいくらか専門にわたるので讀者自身の探究を望む。

昭和十六年三月四日印刷
昭和十六年三月七日發行

西洋哲學史 下卷

定價一圓

著者 藤平武雄

發行者 竹内富子

印刷者 堀内文治郎

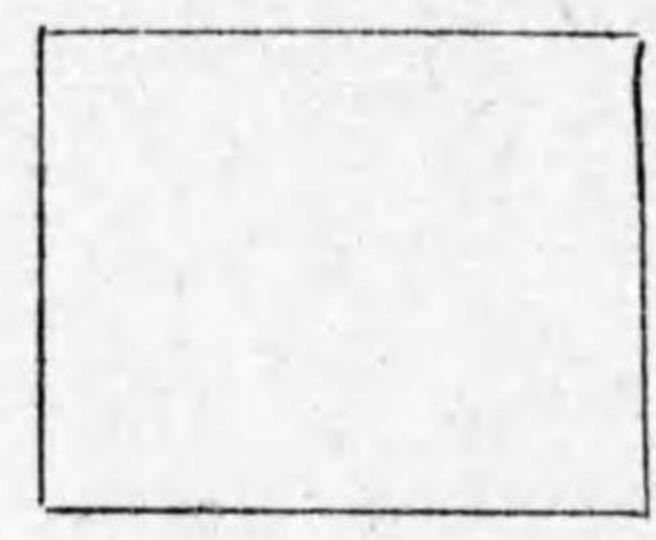
東京市神田區西神田二ノ二一
東京市神田區三崎町二ノ二二

發行所 三笠書房

東京市神田區西神田二ノ二一
電話九段四〇一三番
振替東京二二〇九六番

現代理學藝全書

-3-



小社の出版物中萬一落丁、亂丁その他不備の品がありました場合は、早速御取換へ致しますから、御手数作ら本社宛お送り下さいます様願ひあげます。

現代學藝全書刊行の辭

東亞新秩序の建設は歴史が吾々に課した光輝ある使命である。これが完遂に當つて凡ゆる頭腦の動員が要求され、就中若き世代の中核的推進力としての地位は、極めて輕からざるものがある。出版文化の齎らす意義も、斯る國家的見地から、今日程重大な時はあるまい。しかも近來、用紙難其他各種の統制に際會しながら尙ほ且つ出版界は曾て見ざる好況を呈して居り、この間或は商品主義的なもの無しとせず、國民文化昂揚の上に、渺からざる問題の伏在するのを見るのである。

現代學藝全書はかかる時に當り、出版文化の本來的使命に立脚し、且つ、從來の動もすれば直譯的な文化圏に、日本的創造の生命力を附與し、以て眞に興亞の文化的前進の基地たらしめんとするものである。

學藝全分野を網羅せる本全書の編纂に當つては、各々の部門の讀書人の立場を體し、先づ在來の學問的専門の桎梏を解き、その平明な敘述と、綜合的な、體系とを以ていづれも創造的な、新鮮な知識の淵藪たり得ることに力點を置いた。執筆者は敢へて高名に銜はず、眞に現役的權威、潑刺たる新鋭に懇請し、その學的良識にゆだねた。しかして本全書獨自の壓縮された端的な形式と廉價とにより廣く一般への普及を旨とし、以て學術日本の最前線を宣揚せんとするにある。

時恰も新體制下の文化昂揚の秋、吾々のこの意圖に御協賛御支援を江湖に望んでやまぬ次第である。

昭和十五年十月

三笠書房主識

現代學藝全書 內容

新四六判二五〇頁平均
定價各冊一圓送十錢

哲學・思想篇

- 1 哲學入門 樺 俊雄
- 10 萬葉精神 椎崎法藏
- 3.2 西洋哲學史上下 藤平武雄
- 11 日本神話の精神 前澤雅男
- 4 現代獨逸哲學 鈴木三郎
- 12 科學概論 富成喜馬平
- 5 現代佛蘭西哲學 吉岡修一郎
- 13 心理學 山田坂仁
- 6 現代亞米利加哲學 堀 秀彦
- 14 社會心理學 松浦孝作
- 7 現代日本哲學 瀧澤克己
- 15 宗教文化 熊野義孝
- 8 東洋精神 秋澤修二
- 16 回教文化 小林 元
- 9 日本文化學 池島重信
- 17 法律論 木村龜二
- 18 文化科學 小松攝郎

經濟・社會篇

- 19 經濟學入門 堀 經夫
- 30 蒙古資源經濟論 楊井克己
- 20 經濟哲學 戶田武雄
- 31 支那農業論 佐藤晴生
- 21 經濟學說史 相澤秀一
- 32 支那經濟文化 森谷克己
- 22 財政學 相澤秀一
- 33 北支經濟地理 阿部市五郎
- 23 現代景氣變動論 豐崎 稔
- 34 中支經濟地理 未 定
- 24 貨幣論 青木孝義
- 35 南支經濟地理 河合俊三
- 25 經營學 番場嘉一郎
- 36 支那近代經濟論 宇佐美誠次郎
——歐米資本と利權の解剖——
- 26 電氣經濟論 北 久一
- 37 植民政策史 堀 眞琴
- 27 協同組合論 奥谷松治
- 38 現代勞働政策 江森盛彌
- 28 日本農業經濟論 我妻東策
- 39 獨逸社會政策史 後藤 清
- 29 日本農業政策論 櫻井武雄
- 40 明治社會政策史 我妻東策
——士族授産の研究——

歷史篇

54 空 海人物と其時代史 1

圭室諦成

41 史學方法論 中村吉治

55 源 賴朝

2 遠藤元男

42 亞米利加史總說 恒松安夫

56 織田信長

3 今井林太郎

43 露西亞史總說 除村吉太郎

57 本居宣長

4 北島正元

44 獨逸史總說 富田幸

58 平賀源內

5 高橋碩一

45 伊太利史總說 西村貞二

59 吉田松陰

6 岡 不可止

46 支那史總說 出石誠彥

文藝・教育篇

47 蒙古史總說 青木富太郎

60 文學 概論

龜井勝一郎

48 安南史總說 松本信廣

61 日本文學史

山本正秀

51, 50, 49 世界文化史 上中下 加茂儀一

62 現代露西亞文學

米川正夫

52 近世社會史 住谷悅治

63 獨逸文學史

秋山六郎兵衛

63 日本古代文化 樋口清之

64 佛蘭西文學史

新庄嘉庄

65 英吉利文學史 飯島小平 77 現代演劇論 未定

66 亞米利加文學史 大久保康雄 78 現代映畫論 北川冬彦

67 文藝學方法論 木寺黎二 79 映畫技術論 河邊照男

68 日本文藝思想 釘本久春 80 日本繪畫史 谷 信一

69 支那文藝思想 奥野信太郎 81 日本工藝史 滿岡忠成

70 西洋文藝思想 成瀬無極 82 現代美術 瀧口修造

71 平安朝文學論 川崎庸之 83 音樂 概論 守田正義

72 室町文學論 渡邊保 84 體育 舞踊 石井 漢

73 江戸文學論 稻垣達郎 85 現代教育學 山下俊郎

74 小說論 阿部知二 86 兒童問題 野口樹之

75 批評論 窪川鶴次郎 87 兒童教育論 市橋善之助

76 現代短歌文學論 渡邊順三 88 日本兒童文藝史 菅 道忠

自然科學篇

104	精神病理學	式場隆三郎
105	環境的人間學	巴陵宣祐
95, 94, 93, 91, 90, 89	世界技術史上中下	相川春喜他
106	現代生理學	林 麟
95	理論物理學	石原 純
107	現代生物學	篠原 雄
96	一般電氣理論	吉松氏吉
108	文化と生物學	佐藤隼夫
97	自然科學的世界像	平野次郎
109	生物學史	谷野專治武
98	地震學序說	宮部直己
110	古生物學	西山省三
99	進化論發生學	長廣岸郎
111	發生學史	元村 勳
100	現代實驗理化學	白井俊明
112	生態學	石田周三
101	原子核物理學	未 定
113	下等動物ホルモン	永野爲武
102	現代工業概論	市川忠一
114	血液	谷田專治
103	條件反射學方法論	林 麟
115	病理と豫防醫學	原島 進

語學篇

116	入門獨逸語	石川 鍊次
117	入門露西亞語	除村吉太郎
118	入門佛蘭西語	松尾 隆
119	入門西班牙語	山本直文
120	入門英語	笠井鎮夫
121	入門伊太利語	進藤 遠
122	入門支那語	清野暢一郎
123	入門蒙古語	未 定
124	入門馬來語	後藤富男

~~797~~

~~434~~ 130

F56

終